
僕は使徒

AKA

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕は使徒

【Nコード】

N9117K

【作者名】

AKA

【あらすじ】

サードインパクト後。シンジはアスカたちを救うため過去に戻った。戻ったのは良いが。「何で使徒になっちゃってるんだよ!!」
……シンジは使徒になっていた。

赤い海

海。

赤い海。

落ち着くはずの波の音はむしろ神経を逆なでしてくる。

遠くには巨大な顔が見える。

浜辺に人影がある。2人だ。

それ以外に人の気配はない。

一人は少年。

赤い海になる引き金を引いてしまった少年だ。

汎用人型決戦兵器エヴァンゲリオン、初号機パイロットとして、使徒と呼ばれる生命体と戦った少年、碇シンジ。その表情は硬かった。

もう一人はその横によこたわっている少女だ。

シンジと同じようにエヴァンゲリオンのパイロットだった。

惣流・アスカ・ラングレー。

すでに少女の乗っていた、唯一の心の有り所、エヴァンゲリオンは無い。

「アスカ！起きてよアスカ！」

少年は少女を起こそうと必死に揺すった。

少女に反応はない。

それでも必死に揺する。

どれくらいそうしていたらだろうか。

何日そうしていたか分からない。

周りの赤い海、LCLを少女の口に注ぐ。

そうして必死に延命させていた。

これが本当に少女のためかと思いつつも少年は毎日同じ行動を繰り返していた。

だいたい1週間くらい経ったときだろうか。

少女に反応があった。

「シンジ……」

少年に目をやると優しく微笑んで。

そして消えた。

オレンジ色の液体になった。

他の皆と同じように。

「アスカアアアアア！」

少年は一人ぼっちになった。

そして壊れた。

ザザア。

波の音。

少年は少女がいなくなった場所から動いていなかった。
目に光がない。

虚ろな目が宙をさまよう。

あるときからずっと自問自答を繰り返してる。

……どうして僕はこんな目に遭ってるの？

「僕がアスカを傷つけたんだ！だから罰を受けなきゃ！償わなきゃ
！」

……僕はアスカのことが好きだった。

「ちがう！アスカは僕が嫌いだった！だから僕もアスカが嫌いだった！」

……じゃあ、なんでアスカを助けようとしたの？

「一人になるのがいやだったんだ」

……そして一人になったんじゃないか。

「……もう嫌だよ……」

……割り切ろう。

「アスカのことも。綾波のことも」

……それが僕が傷つかなかったための手段。

少年の目は相変わらず死んでいたが、自我は保てているようだった

た。

心の優しいこの少年にとって、他人を割り切ることは簡単ではなかった。

しかし、時は心を癒してくれる。

100年、1000年、10000年と生きるうちに完全に割り切れていた。

神に等しい存在になった少年は死ぬことはなかった。

誰も傷つかない。自分も傷つかない。そして傷つけあうことのない世界。

少年はそれに満足していた。

そんなある日。

セカンドを救いたいの……？

「綾波？」

突如頭に響いたなつかしい声。

そんなに口数は多くなかったがこの声を忘れるはずはなかった。振り向いた先、赤い海の上にあった。

同じくエヴァンゲリオンのパイロット、綾波レイだ。

あなたは何を望むの……？

「なんだよ。今更何を言いに来たんだよ」

あなたは何を望むの……？

「望んで何になるんだよ？」

あなたは何を望むの……？

少年の口元が歪む。

「それなら、もう一度やり直してみたいかな。あの世界を」

それがあなたの願いなの……？

「この世界は満ち足りているけど、刺激がないからね。もう一度行ってみるよ。あの世界へ」

今のあなたならできるわ……。私が力を貸すもの……。
「本当にやり直せるんだ」

向こうの世界の私もお願いできる……？

「分からないよそれは。機会があれば綾波も救うさ」

碓くん……。

海にたたずんでいた少女はそっと微笑んだ。

すると同時にシンジの意識が遠くなっていた。

赤い海（後書き）

シンジのキャラ、設定を変更しました。

NGシーン

海にたたずんでいた少女はそっと微笑んでシンジの頭をつかむと海へたたきつけた。

そのまま頭を押さえる。

シンジの意識が遠くなっていった。

終劇

棺

シンジは目を開く。

真っ暗。

「目、開いてるよな………?」

目を閉じて開く。

「何でこんなに暗いんだ?」

身を起こす。ガン!

「痛っ! 綾波は僕をどこに戻したんだ?」

狭すぎたのか、すぐに頭が何かにぶつかる。

シンジは真っ暗な空間で考える。

どうやら自分は狭い場所、たとえるなら棺のような場所にいるのに気がついた。

……。

「セカンドみたいに頭が良いわけじゃないからわかんないな………つと」

シンジはつぶやきながら棺らしき物のふたを持ち上げた。

ふたを完全に開けたところでシンジは自分が何もまともっていないことに気がついた。

慌てて棺（仮）に身を沈める。

「綾波………ここはいつたい………?」

落ち着いて辺りを見まわすと、自分が入っているような棺がいくつもあるのに気がついた。

「夜?」

否。宇宙だ。

ということはやっぱり夜?

じゃあ月の代わりにあの空に浮かんだあれは?

「どう見ても地球だよな……。じゃあここは月？」

「そう。ここは君たちが月と呼んでいる場所さ」

横から不意に声が聞こえる。

このしゃべり方……。

目を向けた先にはかつて自分が殺した友だちの姿があった。

「カヲル君……」

思わぬ再会。

「どうしたんだい、碇シンジ君？姿が変わってるじゃないか」

「……え？」

「気がついてなかったのかい？君は僕の姿にそっくりだよ？目の色もね」

シンジは慌てて髪の毛に目をやる。

確かに黒じゃない気がする。銀色だ。

「何でカヲル君が僕のことを知ってるの？」

「僕等も時をさかのぼったからさ」

「僕等？」

「そう。君も含めたほかの使徒たちも戻ってきたんだよ」

「そうなんだ……ん？僕？」

「君はどうしてだろうね？第19使徒として戻ってきたようだね」

使徒。人類を脅かす存在。

「おもしろそうだね。それも」

「……変わったね……君は」

「そう？」

「前の君は触れればすぐ壊れるような心を持っていたのに、今の君には壊れるような心がない」

「あんな世界にいればそうなるよ」

「苦労したんだね君も」

「いや、満ち足りた毎日だったよ。退屈だったけどね」

「それで君はどうするつもりだい？」

「人間に味方するか、使徒として生きていくか、でしょ？」

……人と会話するのってこんなに面倒くさいことだったっけ？

「僕は君に味方したいと思っているけどね」

「ありがとう、カヲル君」

……なぜ僕なんかの味方に？

「僕は人間に味方するよ」

……どうせまたサイドインパクトを起こすんだ。

「それなら僕も人間に味方しようかな」

棺（後書き）

使徒が生まれるのって想像できないから新劇場版のカヲル君の場면을引用しました。

NGシーン

目を閉じて開く。

「何でこんなに暗いんだ？」

本気で身を起こす。ガッ！ブシュッ！
ばた。

終劇

第3新東京市

暗い空間に黒い物体が現れる。

俗に言うモノリスだ。

モノリスから声が発せられる。

「どういう事だ。第17使徒以降は存在しないはずだ！」

「それにタブリスの覚醒も予定よりも早すぎる」

「使える奴は使う。それで良い」

「最初のうちからチルドレンどもに接触させておけば殺した後すぐに精神を病むだろう。そうなればこちらの計画にとって不利益なことは何もない」

「……そうだな」

モノリスは一瞬で消え去った。

月

地球を眺めながらカヲルは鼻歌を奏でる。以前覚えたモノのようでお気に入りらしい。

使徒シンジは服を着ていないので棺の中に小さく収まっている。

「カヲル君。いったいどうやって地球までいくのさ」

「君も使徒だろ？何か能力はあるだろう？」

「自力で行くの？」

「冗談だよ」

……沈黙。

「ところでシンジ君、君、名前はどつするんだい？」

「え？名前？」

「今の時間はもう一人の君が居るんだ。同じ名前の人物が居たらお

かしいだろう？」

「確かにそうだね」

「……渚ゲンドウなんてどうだい？」

「嫌だよカヲル君！僕には分からないよ！」

「渚……カヲリはどうだい？」

「何でカヲル君は僕の名字を渚にしたいんだい？しかも性別変わってるじゃないか」

「分かってないねシンジ君。使徒に性別は関係ないんだよ」

「僕はとても気にするよ」

……なんなんだこの会話は……。面白くもないのに。

口では楽しそうに装っているが目は一切笑っていないことにきづくカヲル。

……シンジ君の心もどうにかしないとだめだね……？

第3新東京市。

駅前で電話をかけていた少年は電話が繋がらないことに苛立っていた。

「待ち合わせは無理か。しかたない、シエルターに行こう」

あきらめて振り返った少年の先に女の子が立っていた。

アルビノ……と言うのだろうか、白い肌、赤い目、そして白いと
言うより青い髪。

思わず見とれてしまう少年。

……何でこんな所に……。

少年がそう思ってる間にどこかに行ったのだろうか、すでに姿はなかった。

細身な少年、碇シンジ。

一応平和な毎日を送っていたのに、突如父親に呼び出されたのだった。

待ち人に会えず、ひとまずシェルターに向かおうと思っていると、突如響く轟音と振動。

「なんだ……あれ……？」

目線の先には見たこともない巨大な移動物体があった。

その巨大物体に攻撃を仕掛ける飛行物体。

シンジはその場に立ちつくし、思わず成り行きを眺める。

「効いて無いじゃないか」

巨大物体は無傷。

むしろ腕からのびる光で飛行物体を打ち落としている。

そしてそのまま落ちてくる。シンジの方に。

死ぬ。シンジが動く暇もなく。

爆発。

シンジとの間に割り込む影。

「ごめんね、シンジ君」

青いルノーに乗ったシンジの命を助けた恩人、というか原因、葛城ミサトだった。

父さん、何で呼んだんだよ……。シンジは思う。

遙か上空にもう一人の自分いるのも知らずに。

第3新東京市（後書き）

NGシーン

そしてそのまま落ちてくる。シンジの方に死ぬ。シンジが動く暇もなく。爆発。割り込んでくる影はない。

「え？」

終劇

月

青いルノーが猛スピードで走る。

「葛城さんですよね？」

「ミサトで良いわよ」

「じゃあミサトさん、どうして父は僕を呼んだんですか？」

「お父さんから何も聞いてないの？」

「はい」

「苦手なのね、お父さんのことが」

「何で聞いてないっていうだけでその結論に達するんですか？」

「私が嫌いだからよ」

「……まあ、当たってますけど」

「シンジ君。細かいところ気にしてるともてないわよ？せつかくの
かわいい顔も意味無くなるわよ」

「……」

無視するシンジであった。

沈黙が続く。

「ねえシンジくん。なんか質問無いの？あのでっかいのは何ですか
？とか」

「だって聞いたって教えてくれないじゃないですか」

「あれはね、使徒っていつて人類を脅かす存在よ……ってまさかN
2地雷を使うわけ？！ふせて！」

言われるままシンジが伏せた直後、まばゆい光とともに車が爆風に
巻き込まれた。

月。

「そろそろ行かないとあつちのシンジ君が初号機に乗る事になるけど良いかい？」

ふとカヲルがシンジに言う。

「えっ？もうそんな時間？」

「しかもちようど良いところにゼーレのお迎えだよ」

「月に？」

「現に宇宙船が来ているじゃないか。人間は凄いね。単体ではたいした力はなくとも、それでも宇宙にくるだけの力があるんだからね」
二人から少し離れたところに宇宙船が着陸する。

カヲルが立ち上がる。

「じゃ、行こうか、シンジ君」

つられて立ち上がったシンジ。

少し話している間に宇宙船にたどり着いた。

「カヲル君。僕は使徒としての名前はあるのかな？」

「使徒である僕にも君がなんて天使なのかは分からないよ。その名はただ使徒を呼び名をつけるためだけにつけられたモノだからね」
「呼び名をつけるためだけ？」

「ただ、使徒の特徴をふまえて名前をつけているようだけどね」

二人は宇宙船内部へと入り、服を着た。

白いシンプルな服。

「カヲル君、僕どうなるのかな」

「君の存在はイレギュラーだからね。そんなことは分からないよ。ところで、名前は決まったかい？」

「どうしようかな」

「もしかしたらチルドレンとして登録されるかもしれないからね」

名前は決めた方が良くないかな。もちろん、名字は渚、だよ
ね」

「どうしてカヲル君はそうしたいのさ」

「今の君の姿は僕に似ているからね。兄弟と言っておいた方が都合
が良いのさ」

「あ、そうか」

悩み始めるシンジ。

「シンジ……。シ、サ、サンジ？」

「どこかのコックさんみたいな名前だよ」

「シンジ……。渚……。ナギサ？」

「どうしてナギサになるんだい？ どうせならカオルにすればいいじ
ゃないか」

「ほとんどカヲル君と一緒にじゃないか」

……。やっぱりあの世界にいれば良かったかな？

シンジの苦悩はまだ始まったばかりである。

「大丈夫だった？」

「ええ。口の中がしゃりしゃりしますけど」

「そいつは結構。それじゃいくわよ。せーの！」

二人でひっくり返った車を元に戻す。

「ありがとうね」

「こちらこそありがとうございます」

車は再び走り始めた。

月（後書き）

シンジの名前が決まらない。

カヲルが終わりならシンジをハジメとかにしようかな、とかなんとか。

これ見た方。意見を下さい。このままじゃずっとシンジの名前を引っ張っていくことになるかもしれないので。

案A ハジメ

案B カイト

案C ワタル

他にも案があったらどんどん言ってください。

ジオフロント

カヲルとシンジに連絡が入る。

「第17使徒タブリス。そして死海文書には載っていない19使徒。お前達はチルドレンとして登録される。19使徒、お前はチルドレン、特にサードチルドレンとセカンドチルドレンに接触してくれ」

「わかった」

「タブリスはアメリカ支部へ輸送される」

「わかったよ」

「ちなみにタブリスは渚カヲル、19使徒は渚カイトとして登録する」

短い会話は終了した。

「名前、決まっちゃったね。シンジ君。……カイト君といった方が良いのかな？」

「変な名前だな」

「しかたないだろう？作者にネーミングセンスがないんだから。それでもがんばったみたいだから」

「……不満。……ところでカヲル君」

「なんだい？」

「サードチルドレン、つまり僕に接触するのは分かるんだけどなんでセカンドにも接触するのかな？」

「好きなんだね、セカンドチルドレンが」

「もうそんな感情はないよ」

何の感情もなしに返される言葉。

「セカンドチルドレンの精神崩壊が人類保管計画には欠かせないからだよ」
「どういうこと？」
「前に君がサードインパクトを起こしたきつかけは？」
「セカンドが死んだと思ったからかな」
「それに第15使徒でアスカくんが元気だったら？その後の計画が狂っちゃうからね」
「15使徒って……精神攻撃してくる使徒か……」
「対策が必要じゃないかい？」

第3新東京市

「さっきここ通りましたよ」
「システムは使うためにあるのよ」
「迷ったんですね」
「くっ……」
そして赤城博士の呼び出し。
エレベーターが開いた先に、ミサトの言う親友が立っていた。
金髪黒眉毛。そして白衣。
「あら、リッコ」
「何やってたの葛城一尉。人手もなければ時間もないのよ」
「ごめん」
リッコはため息をついてシンジの方へ顔を向ける。

「例の男の子？」
「そう、マルドウツクの報告書によるサードチルドレン」
「そうそう、マルドウツクと言えばフォースチルドレンが決まった
そうよ」
「そんなに簡単に決まるモノなの？」
「知らないわ。チルドレンを決めるのは私じゃないもの」

シンジは真つ暗な部屋へと通された。

「あの、真つ暗ですよ」

シンジの言葉に反応するかのように電気が付いた。

突如視界に入る巨大な紫の物体。

「顔？巨大ロボット？」

あわててパンフレットを見る。

「探しても載ってないわよ。人が作り出した究極の人型決戦兵器、
人造人間エヴァンゲリオン。その初号機」

「これも父の仕事ですか……」

「そうだ」

突如頭上から声が降ってくる。

「久しぶりだな、シンジ。………出撃」

「出撃？零号機は凍結中でしょ。………まさか初号機を使っつもりなの？」

「あなたが乗るのよ。碇シンジ君」

沈黙。

「……何で僕を呼んだんだよ！できるわけないよ！」

拒絶。

「なるならば早くしろ。でなければ帰れ！」

沈黙。

「冬月。レイを起こしてくれ」

「いいのか？」

「死んでいるわけではない」

「周りがあわただしく動いていく。」

シンジがふと顔を上げると、ベッドに乗せられたまま運ばれてくる女の子の姿が目に入った。

使徒が攻撃してきたのだろうか。轟音とともに建物が揺れた。

天井が崩れ、シンジに向かって落ちていく。

「！」

ぶつかる寸前、紫の巨大な手が伸び、シンジを守った。

「エヴァが勝手に？っていうか守った？行ける！」

ジオフロント（後書き）

くっそー。ネーミングセンスが全くないぜー。
カイトにした理由は、『マジック快斗』から。

NGシーン

TAKE1

シンジは真つ暗な部屋に通された。

「あの、まっきゅらですよ。あっ」

電気が付く。

「噛んじやった」

突如視界に入る巨大ロボット。

「もっと驚きなさい！男の子でしょ！」

TAKE2

シンジは真つ暗な部屋に通された。

「巨大ロボット?!」

「シンジ君。早いわ

電気が付く。

「できなければ帰れ！」

「司令。早いです」

船

宇宙船の一室、二人は話していた。

周りに人の姿はない。

二人が使徒だとおそれているのだろうか。

「カヲル君。使徒も強くなってるよね？」

「たぶんね。でも今の君なら大丈夫じゃないかい？」

「そうかもしれないけど」

「ところでアスカくんは何故壊れてしまったんだい？」

「セカンド？どうだったかな？」

「人の心は繊細だからね。使徒を倒すよりも難しいね。でも何がアスカくんを傷つけたかは分かるだろう？」

「セカンドは……そうだな。前の僕と同じでエヴァしかなかったんだ。いや、そう思いこんでいたんだ。セカンドなら何でもできたのに、セカンドはエヴァに乗ることしか考えてなかったんだ。」

「それなら、それを分かせてあげれば良いんじゃないかな。アスカくんには他の可能性があることと、エヴァに乗れなくても必要としている人がいるっていうことを」

「別に分からせる必要はないんじゃないかな」

「……変わったね君は」

「別に僕は変わっちゃいないよ。それにさ。セカンドがどうとか言っても人間が助かるには結局僕は死ぬことになるでしょ？」

「生き残るのは無理にしても、アスカくんを支える人が必要だろう？」

「そうかな？僕やシンジが近づかなければ傷つくこともないと思うけど」

「……僕は君も幸せにしてみせるよ」

「？」

ジオフロント

シンジは衝撃で倒れたベッドに駆け寄った。
包帯だらけで見ているこっちも痛くなってきた。さつき見た女の子じゃないか。

「血……？」
抱き起こした手に女の子の血が付いていた。

僕が乗らなきゃこの子が乗ることになる……！
僕が乗らなきゃ……。

「逃げちゃだめだ。逃げちゃだめだ。逃げちゃだめだ。逃げちゃだめだ」

シンジは覚悟を決めた。

「やります。僕が乗ります」
再び周りが騒がしくなった。

シンジは思っていたのとは違うコックピットに乗せられた。
振動から察するにどうやらあの巨大な紫のロボットの内部に入っ
たようだ。

『停止信号プラグ。排出完了』

周りの音、声が普段よりも聞こえる気がする。

『エントリープラグ、注水』

声と同時に足下からオレンジがかった水があがってきた。

「な、なんですか？これ？」

『だいじょうぶ。肺がLCLに満たされれば直接酸素を取り込んで
くれるわ』

この声はさっきの金髪の博士だろうか。

……大丈夫と言われても……。

「まずい……」

『我慢なさい！男の子でしょう！』

紫のロボット、初号機は、射出口へ移動する。

上を見ると、射出口が開いていくのが分かった。

『進路クリア。オールグリーン』

『発進準備完了』

ミサトはその言葉を聞くと、後ろを向き直る。

シンジの父親でもあり、NERVの司令でもある碓ゲンドウ。

「かまいませんね？」

「もちろんだ。使徒を倒さなければ我々に未来はない」

ミサトは再び画面に向き直る。

「発進！」

ミサトの声が響く同時に、初号機は射出口をあがっていく。
シンジの体にGがかかる。

「くっ」

思わず顔をゆがめる。

気づけば初号機はすでに地上に出ており、目の前にはあの怪物がいた。

『エヴァンゲリオン初号機、リフトオフ！』
シンジの戦いが始まった。

船（後書き）

NG

『エントリープラグ、注水』

声と同時に足下から茶色い水があがってきた。

「な、なんですか？これ？」

『チヨコレートよ。好きでしょ？肺がチヨコレートに満たされれば直接血液にカカオを取り込むことができるわ』

「あなたが何を言ってるのかわからないよ！」

終劇

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9117k/>

僕は使徒

2011年8月1日23時30分発行